

“やったー！ 雪だー！”
6歳 ロシア

幼年美術

598

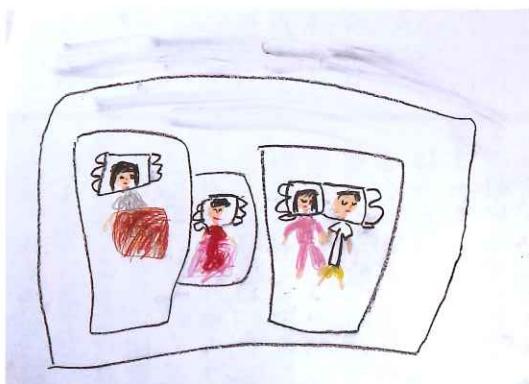
2019 新年特別号

発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ペンてる(株)大阪支社内
全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎(06)6747-1601
発行人 木代喜司
年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)

第48回世界児童画展 作品より



“つみ木の家”
5歳 京都府



“家族”
5歳 北海道



※



特に「ひらめきいっぱい」という目標には驚いた。
どうぞひらめきいっぱいの子ども達の作品に出会えますように・・・

△パキスタン古代美術展の人型石柱 ※
△女優 樹木希林さんの人を引き立てる演技
△ある小学校の教育目標「笑顔・夢・ひらめきいっぱい」

昨年に私を感動させ、奮い起こせた事柄は、

- 戦争のない世界を
- 子ども達にとつて明るく楽しい日々でありますように(虐待やいじめ・貧困のない国へ)
- 若者が希望を持って働ける職場を
- 高齢者が楽しく暮らせる場所を
- 感動ある日々を過ごせます事を

巻頭言

新しい年を迎えて皆様方には期待に胸を膨らませておられる事とお慶び申しあげます。
年頭にあたり、私は次のことを祈ります。

廣富先生退任 お手紙に寄せて

予て、ご高齢による体調不良から、常任委員会や、各種会議・行事への出席が難しくなり、会長職退任の旨を数年前から、口にされていました廣富清海先生のお思いを伺うべく、2018年10月4日、事務局の植野一仁さんと常任委員である私の2名で、先生のお宅を訪問させていただきました。

廣富先生におかれましては、自ら直接出向いて、お話をさせて欲しいところであるが、体調のこともあり、それも叶わぬことなのでと、自ら筆をとられました。何度もその手を止め、暫し考え込まれては、したたかに書かれたものが、掲載画像のお手紙です。周りの尽力に応えられないことを詫びられる、周囲への心遣いを常とされていました。先生らしい謙虚で奥ゆかしいメッセージです。そして、最後に、自身の後任には、副会長の京都教育大学名誉教授の木代喜司先生にお願いしたいと、示されました。

当日伺いました、我々2名は、このお手紙を10月25日開催の常任委員会にて公開し、常任委員全氏からの賛意を受け、木代先生にも内諾を頂戴することとなりました。この様な議を経て、12月1日開催の連立委員会に提出・承認となりました。

當任委員 羽溪 了

朝一番の実技研修は如何でしたか？すごく楽しそうで、私も一通り拝見しましたけれども、時間が足りなかつたのではないかと思います。いま、わくわくした気持ちが、子どもたちがそういう気持ちで、モノという対象に向き合ってくれるといいなと思いました。

今日、私は遊びの話をしますけど、遊びといっても、それぞれ持つているイメージが違うので、こんなふうに遊んだらきっと子どもの遊びも深まるだろうというふうなことを色々ご紹介したいと思います。

まずはあまりに暑いので、今年の

1月に、東京のある子ども園の5歳児がつくった雪だるまです。東京でみんなに雪が積もることはめったにないので、子どもたちもすごく喜んで雪だるまを作っていました。

見て分かるように、これは5歳児が作った雪だるまなんですかけれども、子どもたちがこんなたくさんの中雪に初めて出あつたのにもかかわらず、雪との対話というのすごく進み、お日さまが当たるところの雪は固まらないことをすぐ発見していました。影になつているところの雪がいいと、お互い伝え合つて、5歳児はまたたく間に、これだけの雪だる

聖心女子大學教育學科教育學專攻·初等教育學專攻 教

河邊貴子氏

「遊びを中心とした保育」再考 ～遊びをどう理解し、援助～

河邊貴子先生のご講演を2回に分けてお届けします。ただ、当日のご講演は画像を中心にお話をされていましたが、画像資料は講演目的でのみ使用しているもので、紙面等での掲載は出来ません。当日もフロアからの画像の写真撮影は、ご遠慮願っていました。そういう意味から、掲載にあたっては、講演された言葉

対して、画像から得られる情報と乖離を極力少なくする、文章のみの表現として当日の講演内容との整合性等を鑑み、手を加えております」と、ご理解願います。

まを作っています。これが5歳児。そして次が4歳児ですけれど、なでこんな情けない感じになつたかといいますと、この園は落ち葉がたくさん落ちるところなのですけれど、熊手がおいてあります。その熊手でちょっと削つてみたら、セーターの模様みたいに模様が付いて面白いと言つていました。そしたらもう、削つちゃつて、削つちゃつて、こんなになりました。何かやつてみたら面白いと引きずられて、どんどん向き合つている対象に没頭していくというのを感じました。

そのあとに5歳の子たちがやつていたのが、かき氷屋さんと言つていたのですけれども、かき氷屋さんと言いつ始めた途端に、先生が絵の具を出してくださつたので、絵の具でこんなふうにきれいに色をつけています。これはブルーハワイという名前で売られていて、500円もしました。

こんなふうにしてているので、全員がかき氷屋さんを楽しんでいるのかなと思いますと、そうでもなくて、こんなふうに自分で、これは砂場の道具のところにあつた四角いお皿ですけれども、これで型を抜いてみたりしています。

この男の子はよく見ていますと、茶色の絵の具で十字をつくつて、それからその四隅のところに赤い点を入れて、今度は青いこういう模様を

まを作っています。これが5歳児。そして次が4歳児ですけれど、なでこんな情けない感じになつたかといいますと、この園は落ち葉がたくさん落ちるところなのですけれど、熊手がおいてあります。その熊手でちょっと削つてみたら、セーターの模様みたいに模様が付いて面白いと言つっていました。そしたらもう、削つちゃつて、削つちゃつて、こんなになりました。何かやつてみたら面白いと引きずられて、どんどん向き合つている対象に没頭していくというのを感じました。

入れていって、自分でデザインをすごく工夫しているなど。この子はこのあといろいろな型で、こうやって自分なりのデザインを楽しんでいたように思います。

ですから、雪と対話するという対話の仕方もいろいろで、子どもたちが初めて出あつた対象に、どうやつてそこで自分なりの気付きや発見になるんだろうか?それを見ることがとても大事だなと思いました。

21世紀に求められる力は何かといふことで、いま教育全体の改革が進んで、これから具現化していくところです。これから80年、21世紀の終わりまで、予想もつかない社会になつていて、ということは予想がつきます。

変化の激しいグローバル社会に必要とされる資質、能力とはいつたが何だろう。認知能力が高いだけではなくて、対人関係力も必要だろう。それだけではなくて、困難な場面に出あつたときに、頑張つていこうと、いう人格特性や態度も必要だろう。それが個人の人生の成功に貢献するだけではなくて、そのことによって社会もよりよくなつていく。そういう力が必要と言われています。

つまり、知識蓄積型、これまでから「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、三つの法令が改定されて、この春か

いたり、ほかの人と柔軟に関わりながら課題を解決する力が必要というわけです。

そういうふうに教育を改革してい

こうとしているんですが、新聞をご覧になりましたか?7月31日に全国学力テストの結果が公表され、8月1日には新聞各紙に、その結果が

公表されました。都道府県の順位なんかも出ていましたけれども、一番問題なのは、日本の中3のときの学力テストを受けたことがあります。

21世紀に求められる力は何かといふことで、いま教育全体の改革が進んで、これから具現化していくところです。これから80年、21世紀の終わりまで、予想もつかない社会になつていて、ということは予想がつきます。

いま学力テストの問題は、知識を見るA型と、その応用を見るB型と、二つの問題に分かれています。その知識活用型の問題の方が相変わらず日本の子どもは苦手だという結果が出ています。そつちの方向を目指しているんだけど、まだ苦手。だから、ますます頑張らないといけない。だったら、幼稚期からその基礎を培うべきではないかという流れが、ひしょと押し寄せてきているわけです。

ら実施されていますけれども、小学校以降の教育とつながる言語が共通に入れ込まれています。

それは皆さんも聞いたことがあると思います。育成すべき資質・能力の三つの学びの柱。
①知識及び技能、
②思考力・判断力・表現力、
③学びに向かう力。この三つ力(資質・能力)の基礎を育ててほしいというのが、幼稚教育にこれから要請されているものです。具体的には、幼稚園教育要領、第1章総則 第2で、次のように示されています。

(1) 豊かな体験を通じて、感じたことなどを使い、考えたり、気付いたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

(2) 気付いたことや、できるようになつたことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

(3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

主体的で対話的な深い学び。これは高等教育から下ろされて来ているもので、これが一番出来ていないのが大学教育なんですね。こんな教室で一人の先生が話して、300人の

人が聞いていたら、なかなかアクティブになりませんよね。

そうではなくて、もっとアクティブにしていかないと遊びは深まらないということで、高等教育から下りて来て、これからはグループ学習とか、体験学習がますます大事と言われてきているんですけども、これはそもそも幼児教育では遊びを通してやつてきたものです。遊びはアクティブラーニングです。

これがいま言つた、学びの三つの力の中身です。この三つを見ても、「遊びや生活の中で」と書いてあります。遊びや生活の中で豊かな体験を通じて。つまり、この基礎が身に付くには豊かな体験が必要で、豊かな体験はどこにあるかというと、逆説的に言えば遊びや生活の中にあるということです。だから、いまある園の生活や遊びが、この三つの基礎を培うような豊かな遊びや生活についているかどうかを見直す時期が来ているということだと思います。

今までの幼稚園教育要領の狙いは心情、意欲、態度で示されています。それがどこに来ているかというと、先にお示しした(3)の中に入っています。

でも、これはとても簡単なことで、子どもが育つというのは、それまでの体験をもとにして自ら環境に働き掛け、環境との相互作用。先ほどの雪だるまみたいに出合った環境、対

象と対話しながら。だから、心情、意欲、および態度を身に付けて新たに能力を獲得していく過程である。

これは平成20年のときに示されています。この豊かな心情、意欲および態度というのは学びに向かう力、人間性とは、先の(1)(2)(3)でいうと(3)の部分になります。そして、新たな能力を獲得していくという、この新たな能力のところに知識および技能の基礎

と思考力、判断力、表現力の基礎が掛かっています。

最近、非認知能力という言葉が盛んに使われていますけれども、非認知能力というものは認知能力ではないもの全てのことを指しますが、この二つの分け方にもいま異論が出ており、いろいろな考え方がありますが、今日は時間がないので、そのことは触れません。しかし、子どもたちが毎日の園生活楽しくて、充実した遊びに出合っていると、この学びの三つの柱も経験を通して培われるし、いわゆる認知能力、考える力ですね、それから非認知能力。それらを支える心情、意欲、態度も身に付いていくという構図になっているわけです。

元に戻します。その基礎でけれども、非認知能力のことを考えるとこの二つの柱(1)(2)は特に大事だろう。子どもたちが出あつた対象に主体的に積極的に関わっていくという考え方です。

私は次の日、杉並区に行っています。したけれども、区内の小学校の約半数は、「こんな機会はめったにない」と校長の判断で遊んでいました。その一方で約半分は遊んでいない。20センチも積もった雪と遊ばせられない。「何故、遊ばせなかつたんですか?」と聞いたら、「雪玉が頭に当たつたら危ないから」という理由だったんですね。

私たちが小さいときは、雪の中に入石を入れらなければいけないというルールだつたんです。それぐらい…それが50年ぐらい前ですけれども、この間に、許される範囲がだんだんと狭まつてきている。世界も変わっていますね。こんなに暑くなつては外で遊べない。プールもできない。許容範囲がすごく狭まつていて、豊かさとか楽しみの範囲もどんどん狭まっています。

私は造形教育の専門家ではないです。でも、この生活や体験

の豊かさが狭まつていれば、表現力も貧しくなつていてはいけないかと思います。そこが一番の問題。

他者への豊かな共感性。私たちは一生涯一人で暮らししていくわけにはいきませんので、誰かと関わると楽しいということを、ぜひ幼児教育で経験させたい。経験させたいというか、幼児の細胞の隅々まで、このことを染み込ませていきたいという気持ちです。

子どもの育ちと問題の多くは、生活や体験の経験不足から来ています。だから、なおさら遊びが必要なので、そのためには学習に対する固定概念をどう払拭するか。まだ何か詰め込むことが大事と思っている人もいるし、それが大事と思っている幼稚園もある。

保護者が、こんな不透明な時代だと、早め早めにいろいろなことができる子どもに育てたいと思いますので、無駄なことを先にやつていている。学習に対する固定概念を払拭して、本当に賢い子どもに育てたかったら、乳幼児期は特に(1)(2)が大事です。そういうしないと、その上の認知能力も乗つてこないということを、是非みんなに伝えていきたいわけです。

では、遊びで何が育つか? 目に見えにくい成果をどう評価して、可視化していくかということも大きな問題になってしまいます。

可視化の問題はちょっと置いておいて、子どもの姿がまず、それを表しているということは確かに思いますが。これはこの7月の七夕のときの願いごとです。東北の方はこれから七夕ですけれども、関東の方は7月に終わりました。今年はワールドカップの影響でサッカー選手になりたいとか、こういう願い事がすごく多かったです。ある園では壁に、最初は担任の先生が貼つたんだと思いませんけれども、ある記事が貼っていました。それを見て子どもたちがお家の新聞から切って次々に持ち寄つて新聞局ができました。世界の国境を描く人たちも出でています。この子どもの動きに対応して先生が貼つてくれたポスターには、「世界地図@国旗」と書いてあって、日本が次に対戦する国はどこにあるのかなと調べる子が出てきたり、両脇にある国旗を描いてみたいという子どもも出てきたりします。

子どもたちに特に人気があった記事が川島永嗣選手でした。川島は今回評判が上がったり下がったりでしたけど。子どもたちは川島永嗣といふ選手にすごく引き付けられたみたいで、何と川島を作っていました。

すごいよくできた川島で、これはマコト君という子が段ボールの板を抜いて、川島の格好をしたのを友達が人型に切ってくれて、みんなで色

ムはオレンジ1色でしたから大変描きやすい。それで協力しやすかったんだと思います。東京は京都に負けず劣らずの猛暑ですので、外であまり遊べないんですね。それで、この川島を使って外で遊びたいと言つたんですけど、それができなくて、お部屋の中でキックごっこです。

もちろん、庭でサッカーをやるときには弾む普通のボールでやるんですけど、そのボールをお部屋の中に持つてきたら危険ですよね。それで子どもたちはどうしたかというと、スパーの袋の中に新聞を丸めて入れて、丸くなるように上からガムテープで留めて、弾まないボールを作っています。

弾まないボールというのは狭い場所で遊ぶのにとてもよいし、技能差が出ません。ボールの技能というのは、やっぱやるほど上手になるので、男の子の経験者の方がどんどん上手になります。「ごめんごめん。言い過ぎちゃった」とか。

そうですね。戦いごっこでも、樂しきりすぎてパンチがどこかに入っちゃった。「これはやっぱり危ないからやめようよ」ということになります。最初から禁止するのではなくて、オーバーフローしたところに、自分たちでルールをつくるから、自分たちの中に遊びを通して秩序が生まれます。最初から禁止するのではなくて、自分で人と関わる。そのイメージをつらやめようよ」ということになります。

樂しきりすぎてパンチがどこかに入っちゃった。「これはやっぱり危ないからやめようよ」ということになります。この遊びの状況は変化します。この遊びの状況は変化しますので、そこに内的なルールが生まれたり、喜びがどんどん変化します。この遊びの状況は変化しますので、そこには必ず内的なルールがあります。それは別にお部屋だけではありません。遊びの状況は変化しますので、そこには必ず内的なルールがあります。

1点になるのが分からなくなつてしまつて、先生を媒介にしながら、どこを通ると1点なのかを相談するのです。こうやって、自分たちで次第にルールを作つて、遊びが出来上がりしていくことになつていきました。

そこで、衝立とか、ハーフデッキ

を付けたものです。川島のユニホームはオレンジ1色でしたから大変描きやすい。それで協力しやすかったんだと思います。東京は京都に負けず劣らずの猛暑ですね。それで、この川島を使って外で遊びたいと言つたんですけど、それができなくて、お部屋の中でキックごっこです。

もちろん、庭でサッカーをやるときには弾む普通のボールでやるんですけど、そのボールをお部屋の中に持つてきたら危険ですね。それで子どもたちはどうしたかというと、スパーの袋の中に新聞を丸めて入れて、丸くなるように上からガムテープで留めて、弾まないボールを作っています。

弾まないボールというのは狭い場所で遊ぶのにとてもよいし、技能差が出ません。ボールの技能というのは、やっぱやるほど上手になるので、男の子の経験者の方がどんどん上手になります。「ごめんごめん。言い過ぎちゃった」とか。

そうですね。戦いごっこでも、樂しきりすぎてパンチがどこかに入っちゃった。「これはやっぱり危ないからやめようよ」ということになります。最初から禁止するのではなくて、自分で人と関わる。そのイメージをつらやめようよ」ということになります。この遊びの状況は変化します。この遊びの状況は変化しますので、そこに内的なルールがあります。それは別にお部屋だけではありません。遊びの状況は変化しますので、そこには必ず内的なルールがあります。

樂しきりすぎてパンチがどこかに入っちゃった。「これはやっぱり危ないからやめようよ」ということになります。最初から禁止するのではなくて、オーバーフローしたところに、自分たちでルールをつくるから、自分たちの中に遊びを通して秩序が生まれます。最初から禁止するのではなくて、自分で人と関わる。そのイメージをつらやめようよ」ということになります。

樂しきりすぎてパンチがどこかに入っちゃった。「これはやっぱり危ないからやめようよ」ということになります。最初から禁止するのではなくて、自分で人と関わる。そのイメージをつらやめようよ」ということになります。遊びの状況は変化しますので、そこには必ず内的なルールがあります。

埼玉県のある保育園で、庭で子どもがあんまり遊ばない。ただ走り回っているばかりで、遊びのレパートリーが増えないということで、ここに副園長先生が私の研究室の大学院生になりました。

といつて、小さな子どもでも運べるデッキとか、スギの板とか丸太とかをお庭に用意しました。そうすると瞬く間に、おうちごっこが始まつたり、ハーフデッキを持つていつています。

あるいは、同じスギの板でもバーベキューの鉄板になつたりします。鉄板の上に乗るのは、お庭で咲いているお花や草花なんです。こうやってちょっとものを提供するだけで、子どもたちはそのものを使いながら自分たちの場を生みだして、遊びの状況を生んでいきます。

あるいは、同じものでも、焼き鳥屋さん。泥に枝を刺して焼き鳥を焼いています。ここに買いに行きますと、「タレがいいですか? 塩がいいですか?」と聞いてくれます。あるいは、「ここで食べますか? 持ち帰りますか?」と、自分たちで主体的にすると言葉も出てくる。

又、同じスギの板を使つたものですけれども、金魚すくい屋さん。お鍋にお水を張つて葉っぱを浮かべて、それを金魚に見立てて釣るという遊びです。

あるいは、同じものなのですが、お家で勉強している。赤いお鍋の中にお水が張つてあつて、木の枝にお水を付けて字を書いている。「俺に

も宿題をやらせろ」と友達が集まつてきます。きっと、アジアの片隅で、まだこんなふうに勉強している人たちがいるかもしれないということが、イメージできるような遊びですね。スギの板が出ていなかつたり、材料がなければ生まれない遊びなんですが、子どもは「もの」という対象世界に出あうことによって、いろいろな世界を生みだしていきます。

先ほど挙げた(1)(2)(3)。知識及び技能、それから思考力・判断力・表現力、遊びに向かう力。

これやりたいから。ツムツムやりたいとか、キャンディークラッシュやりたいとか。どんどんステージが上がつていつたらもつと面白くなつて、やりたいだけやりたい。この三つの定義だけだとあらゆる遊びが入ってしまう。

でも、私たちが求めたいのはそういうゲームの遊びではなくて、自分を発揮して自己表現能力を高めていくような遊びです。なので、心理的な見方もそこには必要で、自己決定的にいろいろな動作を追及している状態。

自分のやりたいことをするということは、高い意欲がそこに必要です。ということは高い学習効果もそこに發揮されることになりますし、その結果、高い有能感と能力とか個性が身に付く。

全身を使いながら自分の有能さを

追及していく活動となると、ちょっと難しいんですけど、21世紀型スキルにつなげると、「人が特定の状況

と難しいんですけど、21世紀型スキルにつなげると、「人が特定の状況

の中で真に社会的な資源を自ら引きだしして、動員して全て使って、より複雑な需要に応じる」、こんなことではないかと思います。

これがまさに生きる力ですけれども、それを育むのが遊びだというふうに捉えられます。

だから、保護者の皆さまや誰かに伝える、その意味も兼ねないといけないので、自由保育という言い方はしたくない。一斉保育という言い方もしたくない。遊びを中心とした保育という言い方にきちんと直していきたいと思います。

例え、一人の子どもがどういうふうに遊ぶのか、ちょっと追つてみましようか。これは岡山県での事例ですけれど、3歳児です。3歳はこんな素朴な遊びをします。たつた3年間で、ものすごく協力的に遊べるようになります。

帽子を後ろにしている男の子をちょっと見てください。最初は一人砂場で、籠手とシャベルを持ってペタペタしていたんですね。砂場にぺたつと座っています。

こちら辺で子どもの発達を見ることができます。靴を履くときにぺたつと座つたり、砂場にぺたつと座つてしているのは、だいたい3歳。5歳になつたら絶対座らない。あるいは座

らないように指導する。

最初はお友達が作つていたのを見ていたんですけど、すごく面白くて、あそこに水を流すんですけど、たまたまお友達が足を引っ掛けたばたばたと壊れたんですね。その音

を聞いて、雨どいの方へ興味が行きます。こういうふうになつた偶発的な出来事に興味、関心が移るのが3歳の特徴です。

それから今度、水を流しているところに行つて、この園は大胆ですね。蛇口から直接こんなふうに水流しています。水道から水を流すところに行つて、流れでこないと言ひながら水洗の近くへ行くんですね。

そしたら、こつちが低くなつてみると彼は発見して、水が逆流していることに気付きます。それを自分で直したところを、お友達がドングリを転がして見せるんですね。自分もポケットにドングリが入つていて、自分もドングリを流してみます。

そしたらほかの子がやってきて、たまつたお水のところに木の枝を浸して、天ぷらと言ふんですけど、それには反応しないんです。これは天ぷらじゃない。ドングリをいまから転がすんだという意思表示。

そのうち水道からお水がじやばじやば流れますので、足が汚れて泥だらけになつていることを保育者に指摘され、「靴下を脱ぐ?」と言われたら、その場を離れてうろうろする

んですけれども、砂場の真ん中で行われたドングリ転がしに興味を持ちます。ざるの上にいっぱいあつたドングリを、友達が掘っていた穴に投げ込みます。これも本当に偶然の出会いで、やつてみたいと思つたことをやつているだけ。担任の先生に、「お友達にドングリを分けてあげて」と言われると、役割が与えられたと、ドングリを配つてあげるということを始めます。

お友達に配つたドングリがなくなると、思い出したように始めにやつていたヒューム管、塩ビ管と言つてゐる園もありますけれども、それを支えて中に砂を入れ始めます。そこに先ほど天ぷらと言つた友達や、ドングリを転がしていいた友達がやってきて、スコップを使い、3人協力しながら砂を入れていきます。

こんなふうにして、偶然出合つた出来事をどんどん自分の中に取り込んで、自ら実践参入していく。そしてモノや人に関わって、次に何をしようかということを決めていく。遊びの文脈を生み出しています。

(次号へ続く)



絵を読む会

【四国幼年美術の会】

司会…滝川 稔
助言…大西 健之（滋賀幼美）
フォロワー…篠原 五良

0歳から5歳児まで9人の方から都合34点の絵を紹介していただいた。はじめは緊張の中から遠慮がちな発言や協議の雰囲気であったが、篠原フォロワーの「分からなくても当たり前、みんな一言ずつ口にしてみよう。」の発言から、活発な質問や気づきの紹介が始まつた。

(0歳～2歳児) ぬなくり表現について、「あれ、色が変わった」楽しそうな声が出て、没頭する姿が伺われた。台紙を、Tシャツ方にしちらえた表現を見て、大人に向けて訴えるための工夫がされていた。表現する祭の子どもに寄り添い、語る言葉や、一つの表現から次の表現へと繋がる気持ちをきちんと読み取ることの大切さを確かめられた。

(3歳児) お弁当箱に見立てた画面への表現。保育者の「もっと大きく描いたら…」「お母さんに見せて

絵を読む会

たわつてくる表現が成長を支える。

(5歳児) 言葉の成長に遅れのある子の表現。描きたいものに注力で描きるように支えをすることで、表現を容易に出来ている。意図をくみ取り、大切に見てくれることが安心感につながる。



実技研修

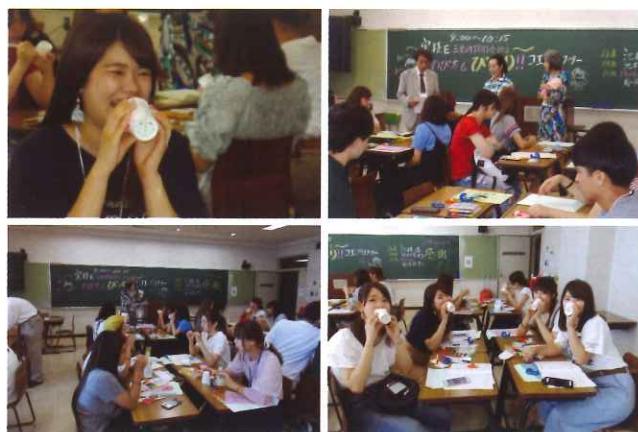
実技研修E 【三重幼年美術の会】

美術と科学と身体運動の
トリプル「コラボレーション」
「のび太もビックリ！」

「コエ（声）コブタ」

指導担当…池村 進
記録…池村 智津子
谷岡 経津子

美術と科学と身体運動のトリプルコラボレーション。この会には十九人の参加をいたいた。声でプロペラが回る。紙コップの底に伝わった声の震動が、つまようじの先につけたプロペラを回転させるのである。この仕組みを参加者の方たちは初めて体験！しかも材料は、紙コップと、つまようじと小さな薄い紙きれだけ。「わあ！おもしろい！」こんな材料だけで作れるなんてすごい！」「大人の私がこんなに楽しいのだから、子どもたちもきっと喜ぶわー」等の声がいっぱい聞かれ、この科学遊びをさせていただけて良かったと思つた。



きました」「もつとこうしたら？」とグレープで見せ合い教え合う姿は、日本の教育で乏しいと言われているグルーブワークを育てる題材にもぴったりであると改めて思つた。講師手作りのソフトを使ってのパソコン画面のプロペラを使つてのプロペラが回転すると、画面上の龍谷大学2号館前の噴水の上にタケコブターを付けた子どもの笑顔が出現する。この様子を多く方が歓声を上げて動画として記録していた。そんな姿から、興味深い内容だったのかなと嬉しく思つた。

この遊び、初めから回転がうまくいく……というものではない。ちょっとした工夫で変わつてくるのである。紙の質や大きさや長さ、つまようじの固定の仕方や、声の出し方等等。ここに保育の大切なヒントが隠されている。このような遊びではとかく指導者主導になりがちであるが、このような場面でも子どもが主体であることを忘れてはいけない。それを参加者に体得して頂きたいと、あえて考えて取り組んで頂く場面を多く取り入れた。「見て下さい！ぼく発見したんです！カップの底めがけて声を出すようにしたらこんなに勢いよく回りました！」

実技研修F【滋賀幼年美術の会】

なかよしのかたちみつけ (土ねんど) 「わたしとねんどが なかよしになる活動」

担当：黄瀬重義
(滋賀幼年美術の会 会長)
大西健之

土（ねんど）の塊は、子どもの中で、土の「ことば」になる。その重さ、その手触り、その形、その土の「ことば」は、子どもと子どもをつなげていく。そして、その場を「なかよしのかたち」にかえていく。

幼児が土ねんどと出会つたとき、最初にすることつて何でしよう。はじめて見る得体の知れない塊にどう接していくか戸惑う子もいるだろうし、すでにどこかで楽しい出会いのあつた子どもにとっては土ねんどは仲の良い友だちでしよう。そんないろんな子どもの中に土ねんどが加わつたとき、活動のはじまりに時間差はあつても、することはみんな一緒にです。



きます。これらの一連の活動を参加者のみなさんに体験してもらいました。テーマを決めて何かを作ることの前に、感じてもらう時間を大切にしました。これらの活動は、子どもも大人も関係なく夢中になれます。それが土ねんどの力です。参加者のみなさんも自分の担当している子どもたちを思い出しながら取り組んでいました。土ねんどは子どものやりたいことをちゃんと聞いてくれます。けれども、子どものがいなりになるわけではありません。放つておいても大事に握つていっても乾いてしまいます。高くつむと崩れます。時間とともに固くなりますが、聞いてくれるけれどいいなりにならない土、子どもと土の対話がはじまります。そこには、子どもと土のなかよしのかたちがあります。そんな土ねんどの魅力にふれていただいたひとときでした。

実技研修G【京都幼年美術の会】

障子紙でいろいろあそぼ

担当・立石 知恵美

補助・中村 澄江
記録・福田 尚子

子どもの『いたずら』…身近なものに目を向け、子どもが自分でやってみたい！と手を伸ばした遊びこそ、子ども達は目をキラキラさせて遊びます。発達も興味も様々な個性豊かなクラスの子どもたちの姿から、子どもと楽しい遊びを見つけました。

◎きりふきで キレイな紙づくり
家庭で使い終えた空スプレー（虫よけスプレー、消臭スプレー、など）に、水と絵の具を入れ障子紙にシッシュユツと吹きかけていくと、あら不思議…素敵な模様の出来上がり！

◎きれいな砂で ふしげな紙づくり
カップに入れた魔法の砂（実は塩）に絵の具を入れて、混ぜてみると：それぞれの色のきれいな砂の出来上がり！紙にボンドで線や模様を描いていき、その上に色を付けた魔法の砂をのせていくと素敵な砂絵の出来上がり！

◎テープと絵の具で すてきな模様づくり

今回はマスキングテープを使用。テープを自由に障子紙に貼つていきます。テープだけで模様が出来たら今度は絵の具で紙に色を付けていきます。（子どもと遊ぶならローラーを使っても楽しい）

絵の具で遊び終えたら、テープを紙から外していく。テープを張つた部分には絵の具が付いていないのでここにも模様が浮かんできます！

◎バラバラバスで 歌つて踊つて
きれいな紙づくり

牛乳パックに障子紙を入れ込み、使い古しの小さくなつたバスを数色入れる。蓋をしてバスが飛び出ないようにしてから、思いつき振り歌つたり踊つたりしてもOK！ひと遊びしてから牛乳パックの中の障子紙を取り出すと、ここにもきれいな模様が出来上がり！

時代に戻つて楽しんだ研修となりました。

挟み、糸を引きます。広げると糸の面に付いた絵の具がかすれたきれいな模様になります。開いた時、模様がそれぞれ違うので、何に見えるかななどお互いに見せ合つて楽しむことができました。

②合わせ絵

画用紙にポタポタと筆で絵の具を落としたり、また保水キヤップ（ランなどの切花を差している物）に絵の具を入れて、軽く振つたりしました。半分に折つてこすり開くと、絵の具が混じりあつた左右対称のきれいな模様ができました。

③型押し

タンポは、中にシユレッダトで裁断した紙を入れたり、又、小容量のペットボトルの底にプチプチを卷いたりと、身近にあるもので作り、それを使って型押し版画をしました。画用紙の下に新聞紙（朝刊一日分）を敷き、型がきれいにつくようにしました。作った物や用意した型で工夫しながら、イメージを膨らませ押していました。

参加者から、「タンポって手軽にできる」「プチプチの型がきれい」「素材を利用する事で遊びが広がることに気づきました」との声がありました。



実技研修H【和歌山幼年美術の会】

写して写つて豪ぶ版画遊び

担当・辻 仁美

補助・山崎 幸子
記録・藤原 美穂

①糸引き
絵の具をつけたタコ糸を画用紙にいました。

今回は、色移りが良く、手軽にきれいな版画が楽しめる事の出来る、「ぺんてる共同制作えのぐ」を使いました。



実技研修ー
【四国幼年美術の会】
フードカラースプレーで遊ぼう！
指導担当：雁木君江
(丸亀市立城南小学校)
フードカラースプレーは、水で溶



いたフードカラー（食紅）をスプレーボトルに入れて吹き付けて着色す

るもので。ブラシと網を使うスパッタリングと異なり、作業がスピーディーで、垂直面や立体にも簡単に色づけることができます。参加者の皆さんには、初めて見るカラフルなスプレーに「何これ？おもしろそ

う！」と興味津々の様子で、始まる前からあちこちで声が上りました。実際に YouTube で見られることを紹介し、グラデーションや型写し等をしつかり体験した後、現職者と学生が交流できるようグループに分かれてスプレー遊びをしました。用具を貸し合ったり、「わあ、かわいい！」と声を掛け合ったりしながら、あつという間の時間でした。

最後にみんなの作品をずらつと床に並べて鑑賞すると、海あり、空あり、四季があり…ふわっとしたスプレーの色の中に個性あふれる世界が広がっていきました。

黒板や机の汚れ防止のために使った塗装用の「マスカテープ」は安価で、片付けも剥がして丸めるだけの優れものです。参加者の皆さんのが協力で、すべての片付けまで時間内に終えることができました。

今回は、安全性を考えて食紅を使いましたが、子どもたちにはスプレーは紙に向かつてするものということをしっかりと伝え、活動を見守ることが大切です。色素等のアレルギーを持つ子もいるので、その場合は、おうちの方に手袋を用意してもらう

実技研修J【中国幼年美術の会】

《身近な紙を使って》
「造形活動を通して
見立ての力をつける」

指導担当..楳埜 玲子
補助..葉田 美穂子
記録..杉原 明美

- ①指導者の声かけによりはさみで切り進める。「紙の端から入って2回チヨキチヨキ、クルッと回って（方向転換）3回チヨキチヨキチヨキ、クルッと回って2回：（何回かくり返す）、出ますチヨキン。」
- ②切った2枚の紙を隣りと交換する。（※交換することがより造形活動を進展させる。また、もらった形を大事に扱い、対話が生まれる。）
- ③2枚を組み合わせて何に見えるかをイメージし、画用紙に糊で貼る。
- ④ペンで加筆し、題名・名前を書く。
- ⑤周囲の人と作品を見合い対話する。

折り紙や画用紙をはさみで切ったり、箱を開いたりしてできた形を見立てる活動を行った。偶然できた形を見てどんな形に見えるか、自分なりの発想を膨らませて造形を楽しめ、見立てる活動を続けていくことで「発想力・構想力」を培うことができると考えた。

1. 1枚の折り紙から

①指導者の声かけによりはさみで切り進める。「紙の端から入って2



1では小学校、2ではトラ。
1と2は同じような実技だが、折って切ると左右対称の形になり、1との違いがおもしろい。



右は1の実技でゾウ。赤ペンでリンゴ・耳・尻尾を加筆。
左は2の実技でSL。くりぬいた中を煙突にしている。



切り抜いた部分をライオンの顔にして糊で取り付けることで歩き出しそう。

3. 半分に切った画用紙から 《はさみで切る方法は同様》

組み合わせて立体作品にする。動物や乗り物など様々なものができる。

2. 半分に切った折り紙から
《はさみで切る方法は同様》
わさからはさみを入れ、わさから出る。線対称の形ができる。白い画用紙に貼ることで何に見えるかイメージし易い。

2. 半分に切った折り紙から

わさみで切る方法は同様
わさからはさみを入れ、わさから出る。線対称の形ができる。白い画用紙に貼ることで何に見えるかイメージし易い。

4. 箱を使って
身の回りにある箱を準備。箱を開いて何に見えるか見立てる。
余分なところは折り曲げるなどして工夫する。加筆する。



箱を一部分開いて、立体的に仕上げることもよい。切り込みを入れてより立体的に。

これらは、何に見えるかを考えることで、子どもたちが喜んでできるクリエイティブなアートトレーニングである。



実技研修K【美育文化ボケット編集委員会】

ためしてつくつて、光と影から生まれる、せかい

担当..秋山道広
(芦屋市立精道小学校)

今回の講座は、保育や教育を司る大人が、知らぬ間に持っている「美」への認識（①こうすると綺麗だよ。②もつともつとこうしてごらん、美しくなるよ。）を、造形遊びに浸ることによって再認識（①あつ！本當だ！きれい。あれー？どうしてかな。②そーか！なるほど！すごいね！）することを目的としました。暗くした環境の中で、光という探求の道具だけを提示し、指示をできるだけ控え、参加者の方々の目の先を

光をあてると影ができるなどを私たちは知っています。では、いつの頃から知ったのでしょうか。もしくは光について、現在いかほどの知識を持っているのでしょうか。光

を透明素材に当てる、透き通った綺麗な影ができるとか、多様に反射し降り注ぐと、その先に美しい光の玉が、うごめいたりすることなど、知識として持っているかのようにも思えます。では、その「綺麗」とか「美しい子どもに教えていくものなのでしょうかと尋ねられると、皆さんはどう答えるでしょうか。この質問を、絵や制作の場合と対比させて考えてみると分りやすいのかも知れません。綺麗か否かの判断の主体はその人の中に、つまり絵を描いたり制作する子どもたちの中にあるということでしょう。

今回の講座は、保育や教育を司る大人が、知らぬ間に持っている「美」への認識（①こうすると綺麗だよ。②もつともつとこうしてごらん、美しくなるよ。）を、造形遊びに浸ることによって再認識（①あつ！本當だ！きれい。あれー？どうしてかな。②そーか！なるほど！すごいね！）することを目的としました。暗くした環境の中で、光という探求の道具だけを提示し、指示をできるだけ控え、参加者の方々の目の先を



実技研修」〔べんてつ中央研究所〕
くれよん・パス・コンテ。
ゆびえのぐの基礎講座
初任者のための研修
～ 固形描画材の特徴を、実技を
交えて楽しく理解しましょ～



一緒に見ることだけに専念しました。すると、そこには私が今までに見たことのない光の美しさとともに、造形を探求しようとする皆さんのお姿がとても美しく映りました。

全国幼年美術の会 運営委員会
2018(平成30)年12月1日(金) 10時30分～ 龍谷ミュージアム
議事録

全国幼年美術夏季大学（第55回 支援報告・第56回大会）について

- # 員会 議事録

10時30分、龍谷ミュージアム

さて、巻頭言は、この新年から会長に就任いたしました木代喜司先生です。作家としては、日本特別会員の彫刻家で、京都教育大学の名誉教授です。素材と闘わる中での出会いを大切にされる、又楽しむ制作姿勢から、技術偏重ではない、アートの本質を大切にされる先生です。副会長職を勤めたり、夏季大学での実技講習に先駆して講師を勤めていたなどしています。巻頭言では、現状ではおかしな状況に向かう不安な社会が、何を目指すべきか、そのあるべき姿を訴えながら、その上に「感動」することの大切さを仰っています。感動とは、心を震わせるという出合いと、それを感じる私心が大切ではないでしょうか？特に「ひらめきいづばい」などの「ひらめき」に心震わせる自分でいたいし、そういう環境作りのお手伝いが出来る自分でありたいですね。

伺います。子どもの表現活動を見ながら、表現に関わることもの心こそが一番大切と、常に心を配られたいことは確かです。幼美での学びにご縁をいただき私もも、このお心を大切にしながら、日々研鑽を重ねたいのです。この場をお借りし、生前のご指導に深く感謝申しあげたく思いました。有難うございました。

あとがき

(編集担当 羽溪)